

平成23年度第2回山形県立図書館協議会議事録要旨

平成24年3月2日(金)

13時30分～15時30分

1 出席者

- 協議会委員；佐多不二男委員長、佐藤晶子委員、鈴木雅史委員、竹田真知子委員、西村仁美委員、沼野慈委員
- 県教育庁；井上生涯学習振興課長、同菅原主査
- 県立図書館；佐藤館長、秋葉副館長、渡部主幹、渡辺主幹、山中資料管理専門員、鎌戸調査相談専門員、鈴木資料整備専門員、富樫運営企画専門員、小林総務専門員

2 傍聴者；1名

3 あいさつ

○ 井上生涯学習振興課長

新図書館コンピュータシステムの導入、手づくり絵本コンクールの成果、図書館関連の24年度予算要求の状況、五教振の後期プランに沿う第2次子ども読書活動推進計画の策定、学びのセーフティネットとしての公共図書館の役割について

○ 佐藤図書館長

東日本大震災と施設の危機管理、震災関連の企画展示、読書活動における学校図書館との連携、遠隔地サービス、ホームページの活用、利用者アンケート調査等と広報活動について

○ 佐多委員長

東北文教大学では今、新しい教育学である臨床教育学について学生と共に勉強しています。その代表的研究者である北海道教育大学の庄井良信氏の著書『フィンランドに学ぶ教育と学力』を紹介させていただきたいと思います。

フィンランドと言えば、“サンタクロース”や“ムーミンパパ”の世界で有名ですが、OECDの主宰する国際学力比較調査で2000年、2003年共に世界トップの座を獲得し、今なお揺るぎない地位にある国でも知られています。社会保障を徹底的に追求する国がどうしてあれだけの学力を保てるのか不思議でもあります。日本の文科省の中には「子どもたちがしのぎ合い、競争し合う中で学力が高まる」という考え方を持つ方もいますが、フィンランドでは全く違って「教師や子どもたちに競争をあおらない」という考え方が根づいています。日本もそのような社会になればいいと学生たちと話しています。

庄井氏によると、ヘルシンキの広場の前に「3人の鍛冶屋像」という銅像があり、これはフィンランド国民の願いを象徴しているものだそうです。3人の像は、3つの縁、すなわち課題縁、問題縁、そして物語縁を表しています。課題縁とは課題の実現のために一緒に夢をかなえようということであり、問題縁とは問題の解決のためには困ったときはお互いさまという考え方です。そして、物語縁とは現実の世界を離れて、自己と世界、自己と他者、自己と自己自身との関係を編み直していくということです。この3つの縁を果たそうとする鍛冶屋像が今なおフィンランド国民の心を励まし続けているのです。

フィンランドでは、長い夜に家族がゆったりと語り合うことで、大人たちは子どもたちの課題解決の力を信じてそれを託すのです。

このようにフィンランドは図書館活動がさかんなところですが、山形県でも絵本コンクールなどを通して若い人たちの夢や想像力を広げることに力を入れていると伺っています。さらに、県内の公立図書館や学校など様々な教育機関との連携を強めながら、読書の大切さを伝えていただきたいと思います。

4 協 議

(1) 平成23年度図書館運営の状況について（事務局説明）

○ 西村委員

利用状況についてですが、1日平均700人を上回る利用があると説明がありましたが、たいへん利用が多いと率直に思いますし、活発に利用されているように見えます。しかしながら、県立図書館の利用者として700人という数字が県民のうちどのくらいの割合なのかを考えると、この数字をどう捉えたらよいのか悩むわけです。利用状況の統計をとるときに、人口に占める割合として示していただくと、重点施策としてターゲットになっている“利用しない人”がどのくらいいるのかが明らかになると思われま

す。また、高齢化社会になっていますので、年代別の利用状況が示されれば、全体に占める若い人たちの利用状況の推移が見えてくるのではないのでしょうか。来年度から、年代別の利用状況を人口全体の比率として示していただくと考えやすいと思います。

当面の重点施策についてですが、たいへん重要なことと思います。中学校を運営している者として、課題解決支援とレファレンス機能の認知度が低いということについて、考えるところがあります。

中学校に総合的な学習の時間が取入れられて何年も経つのですが、何かで調べて課題を解決するということが身につけにくいのです。なぜかというと、指導する教員自身が調べ方の教育を受けていないため、生徒に調べなさいと言っても、細かな段階的な指導ができないからです。

図書館にレファレンスというサービスがあることを多くの子どもたちは知らないで育ちます。そういう子どもたちが県民になるので、わからないことは図書館に行って調べればいいという素地が育っていないのだと思います。また、静まりかえった建物の中でのものを尋ねることが、控えめな県民性もあってしにくいのかもかもしれません。小中学校の図書館に専任の司書は少なく、高校にも配置されにくくなってきていると聞きます。小中学校で調べ学習をしようとしても、レファレンス機能を果たす図書館は少ないと思います。調べ学習のモデル的なものを出前講座の形で、他の学校と連携しながら県立図書館が示していただけたいと思います。例えば、中学校で調べ学習の課題とすることが多い「環境」について、図書館ではどのように調べるのかをパスファインダーやモデル授業スタイルで示していただきたいと思います。中学生のうちに「課題を解決するには図書館を使う」という学習経験を多く積むことにより、やがて大人になり“県民”になったときに、自分のほんとうの課題の解決に図書館を利用できるようになるのではないかと思います。

○ 事務局

パスファインダーについては、実は当館でも講師を招いて作成の取組みを始めたばかりで勉強しているところです。研修会や講習会の形で検討していけたらと思います。

利用統計については、年代別に人口に占める割合を意味のある数値で表すことができるかどうか工夫をしてみたいと思います。当館の利用者は頻繁に来館する方が多くを占めているので、多くの非来館者に十分な手当をしていきたいと思っています。

○ 佐多委員長

ただいま、西村委員からは学校の調べ学習をする際に、県立や市町村立図書館のレファレンスサービスの利用のしかたが熟知されていないので、他の学校と連携しながら県がモデル事業として進めていただけたらありがたいというご提案がありました。重要なお指摘だと思います。

○ 佐藤委員

入館者数について、年間15、6万人という数字はやはり多いと思います。資料の利用者アンケート調査によりますと、週に1回以上来館して利用なさる方が前は33.9%であったのが、今回は37.1%になっています。館長さんがおっしゃるように非常にリピーターの多い図書館だと思います。今回の調査を県立図書館だけでなく、山形市立や鶴岡、酒田の図書館のデータと比較してほしいのです。今回のアンケートで、県立図書館の利用者だけでなく遠くに住む県民に対しても併せて調査したことはよいことだと思います。しかし、県内35市町村の図書館が一斉に調査し比較することも大切です。自館の結果を示すだけでなく、他と比較することでよい所を伸ばし、足りない所を補強することができるのではないかと思います。

手づくり絵本コンクールの選考委員でもあった赤木かん子さんですが、東京都内にお住まいでいろいろな学校の調べ学習について長年指導しています。県内でも先進事例として、山形第一小学校の学校図書館の改造などもしています。また、白鷹町の学校図書館に招かれ、ポプラ社出版の小学生向け百科事典「ポプラディア」を使って、調べ学習のしかたを指導したこともあります。調べるときの子どもたちの目がキラキラと輝いていたそうです。鶴岡朝暘第一小学校では、先生の指導もあって上級生が下級生を育てており、子どもたちのほうが図書の種類番号に詳しくなっています。先生の指導により調べ学習のよさが見えると、子どもたちは教え合ったり響き合ったりして次の世代につながっていくのです。ご参考になればと思い、かん子さんの事例を紹介させていただきました。

学校現場に、書籍を愛し、子どもを愛し、本の世界や調べかたを教える人材を配置しない行政にも問題があると思います。学校図書館に本だけ並べて置くのではなく、指導できる先生がいるという社会になってほしいと思います。

○ 事務局

図書館協会の事業として、資料23頁のとおり図書館利用ハンドブックの作成を実施し

ています。これは、平成20年度から21年度にかけて学校と公共図書館の連携について実態調査を行い課題を整理した結果、学校図書館向けに公共図書館の利用のしかたについて雛形を作成し配布したものです。各公共図書館の実態に合わせて活用していただきたいと思っております。

○ 沼野委員

利用に関する統計資料について、前年度との比較しかありませんが、利用の傾向をみるには少なくとも3年分くらいは必要かと思っておりますので、もう少し比較する年数を増やしていただきたいと思っております。

インターネット予約資料数については、着実に増えてきているようですね。自宅でインターネットにより情報を収集することは、青年層ばかりでなくわれわれ世代も日常茶飯事になってきています。さらにインターネットサービスの定着を図り、利用を伸ばしていただきたいと思っております。

数年前に「就職支援」という提案をしましたが、「ビジネス支援」という名称で奥の深い幅のある取組みにさせていただき感謝申し上げます。さらに、取組みを進めていただきたいと思っております。

子どもの調べ学習についてお話がありましたが、大人の立場から申し上げたいと思っております。例えば、県政課題についてパブリックコメントが行われることがよくあるわけですが、県民がきちんとしたデータを基にした提言をしようとする場合、インターネットなどを使ってもなかなか求める資料にたどりつけないのです。一例を挙げますと、今注目度の高い「再生可能エネルギー」についてポテンシャルを調べたいと思っても、データに基づく説得力のある提案はしかねるということになります。県立図書館にアクセスすれば、一般県民がそういうデータを手に入れることができるように、“大人の課題解決のための”図書館の活用のしかたがあればと思います。これが県立図書館である所以だと思っておりますので、これからの取組みに期待しています。

○ 事務局

大きな問題ですが、レファレンスとデータベースの充実、ホームページの活用法の観点からこれからいろいろ検討して参りたいと思っております。

(2) 平成24年度図書館運営の方針について（事務局説明）

○ 鈴木委員

企画展についてですが、“図書館資料を知ってもらおう”うえで重要であると思っております。図書館を訪れたときは、どういう企画展をやっているのか興味を持っています。ですから、年間の開催回数が5回とは少ないように感じます。県立図書館には膨大な資料があるわけですから、閉架に宝の山が眠っている状態ではないかと思うのです。普段われわれが見ることができないものの中から、こんなにすごい資料もありますよといった視点を変えた展示方法もあるのではないでしょう。最近書店でよく見かけますが、店員さんがポッ

プを書いて本の宣伝をしているように、個人的な思いを込めて紹介するという方法もあってよいと思います。また、山形県内の作家の方、図書館の方、読書サークルの方などから図書館のお薦め本を選んでもらい展示するなどの方法もあると思います。図書館に來ればいつでも何かやっているというような活動を期待しています。

○ 事務局

企画展示の回数が少ないとのご指摘がありましたが、一回の企画展示を開催するために、本を選んだり、リストを作成したり、リストから書誌情報につないだりと相当の業務量があることも実情としてあります。しかし、委員のご提案にあった外部の人に本を選んでもらうという視点も検討し、どのように工夫していけるか考えていきたいと思っています。

○ 竹田委員

山形北高では読書に力を入れておりまして、朝読書から一日が始まります。また、3年生を対象として希望者に図書館講座を開いており、もともとは平成4年度に小論文対策としてスタートしたのですが、読書に力を入れる活動として継続しています。このようなことから、子ども読書活動の優秀実践校として今年度文部科学大臣表彰をいただきました。

本校には司書がおりますし全職員が読書に理解があり、読書活動を進めるための工夫もしています。手づくり絵本コンクールについても、司書の先生の奨めで応募した子どもたちが多くおり、そのなかで3年生が最優秀賞までいただきました。卒業式前日の表彰式で伝達しましたところ、応募作品が本になったということで生徒たちもたいへん喜びまして、来年度の応募意欲につながったようです。図書館講座のテーマは「教育」や「生と死」、「環境」などさまざまですが、テーマについて調べたものをまとめて発表し意見交換をしようというものです。こうしたテーマに関して、県立図書館の資料をご紹介いただく機会があればありがたいと思います。

高等学校では今年度から年次計画により図書館の整備が始まっていますが、電子書籍に対する対応について検討を進めることになっています。図書館ではどんなことを考えているのかお伺いしたいと思います。

○ 事務局

今のところ、模様を見ているところです。国のほうで出版業界と利用者の関係についてさまざまな課題の検討を行っているところです。一部の図書館で出版社のPRの形で試行的に電子書籍の提供を行っているところもありますが、読み取り機がバラバラであることや有料無料の問題など多くの課題があるようです。どういう方向にいくのか関心を持って見守っているというのが正直なところです。

(3) その他

山形県図書館協会の事業について（事務局説明）

5 その他

図書館条例の改正について（事務局説明）

6 閉会